

4. 本園の本質的価値

本園の本質的価値とは、芸術上・観賞上の価値等を示すものである。歴史的変遷を踏まえ、以下に本園の本質的価値を整理する。

4-1 本園の本質的価値

(1) 東京郊外の台地と斜面の地形を利用し、和洋が調和した特徴的な近代の邸宅庭園

明治、大正の元勲、実業家の多くは、郊外の高台に邸宅を構えた。飛鳥山に渋沢栄一が邸宅を構えるなど、駒込、飛鳥山周辺にも多くの邸宅が造られた。こうした中、明治の外交を牽引した陸奥宗光の邸宅を古河家が譲渡され、この地に古河邸が整備されることとなった。

本園は、台地と斜面からなる地形を利用し、台地上には、洋館と芝生広場を配置し、続く斜面には、地形を巧みに利用したテラス式庭園と、台地の高低差を利用した大滝が整備され、また、湧水の豊富な崖線下は池泉回遊式日本庭園とし、さらに敷地東部の斜面上の平地には茶室とそれに伴う茶庭が配されている。

明治・大正期の邸宅庭園では、洋館と洋風庭園、和館と日本庭園を併設した例が多く見られるが、本園は、主屋である洋館を中心とする洋風庭園、池泉回遊式日本庭園、茶室・茶庭という和洋が見事に調和するという点で特徴的であり、その様相が今日まで残されている貴重な近代の邸宅庭園である。

(2) ジョサイア・コンドルの日本文化への深い理解が生み出した洋館と洋風庭園

日本における西洋建築の父と言われるジョサイア・コンドルにとって、古河邸は現存する最晩年の作品である。洋館は重厚な石積みの外壁に、軽快な切妻屋根を組み合わせたピクチャレスク（絵画的）な構成が特徴であり、また、1階は迎賓機能を含む公的空間として洋風の意匠としているが、2階は日常生活のための空間として、主要な部屋には真壁、畳敷きの伝統的な和室をそのまま洋館に採り入れている。このような手法は、これまでのコンドルの作品では例が無く、旧古河邸で確立されたものと見られている。

洋館は、高台の斜面を利用したテラス式庭園と共に本園の主要な景観を構成し、来日以来日本の文化や芸術を探究し続けたコンドル自身の、日本文化への深い理解が生み出した作品として、貴重な価値を持つものである。

(3) 七代目小川治兵衛（植治）の伝統的な技術を生かした日本庭園

本園の崖線から低地部に配置された日本庭園は、七代目小川治兵衛（植治）が東京で作庭した最初期の作品である。小川治兵衛は、崖線斜面部に落差のある大滝や茶室・茶庭を配置した一方、低地部には池を中心とする多様な水景で構成された回遊式庭園を配置するなど、崖線地形の高低差を利用した作庭を行った。また、日本庭園と洋館や洋風庭園との接続部分においても地形を活かした巧みな景観処理を行っており、こうした作庭技術は、古河邸の中に洋館・洋風庭園と日本庭園という性格が異なる景観を同時に並立させる地割を可能にした。

このように本園は、七代目小川治兵衛が伝統的な技術を発揮して作庭した日本庭園が、コンドルによる洋館・洋風庭園と並立し、その特徴が良好に保存されている貴重な近代庭園である。

(4) 明治・大正期から現在まで、時代の要請に応えながら継承されてきた文化財庭園

本園は、古河家が所有した時代には、本邸としての生活の場であると同時に、古河財閥の貴賓接遇の場として海外の要人などを迎え、様々に利用されてきた。また関東大震災の際には、古河虎之助により全邸が開放され、避難者の収容や救護にあたり、震災後の被災者支援の拠点として大きく貢献した。

戦後、本園は古河家の手を離れ国の所有となったが、北区では大規模な公園が少なく、豊かな自然の残る本園の開放を求める地域住民からの強い要望があった。こうした声を後押しに公共の庭園として開園された本園は地域の中で極めて貴重な存在となった。

様々な時代の要請に応えながらも、古河家の歴史を背景にした文化財的価値を有する洋館、洋風庭園と日本庭園、茶室・茶庭などが変わらず残されており、古河邸として守られてきた歴史的価値を、都立庭園となってから現在まで継承・発展させている。

4-2 庭園の価値を構成する要素

平成 22（2010）年度改定の「東京都における文化財庭園の保存管理計画」（以下、保存管理計画という。）で分けた景観ゾーン及び地区をもとに、本園の特色に基づき、図 2-154 のように、3つの景観ゾーン及びA～Nの地区に分けた。

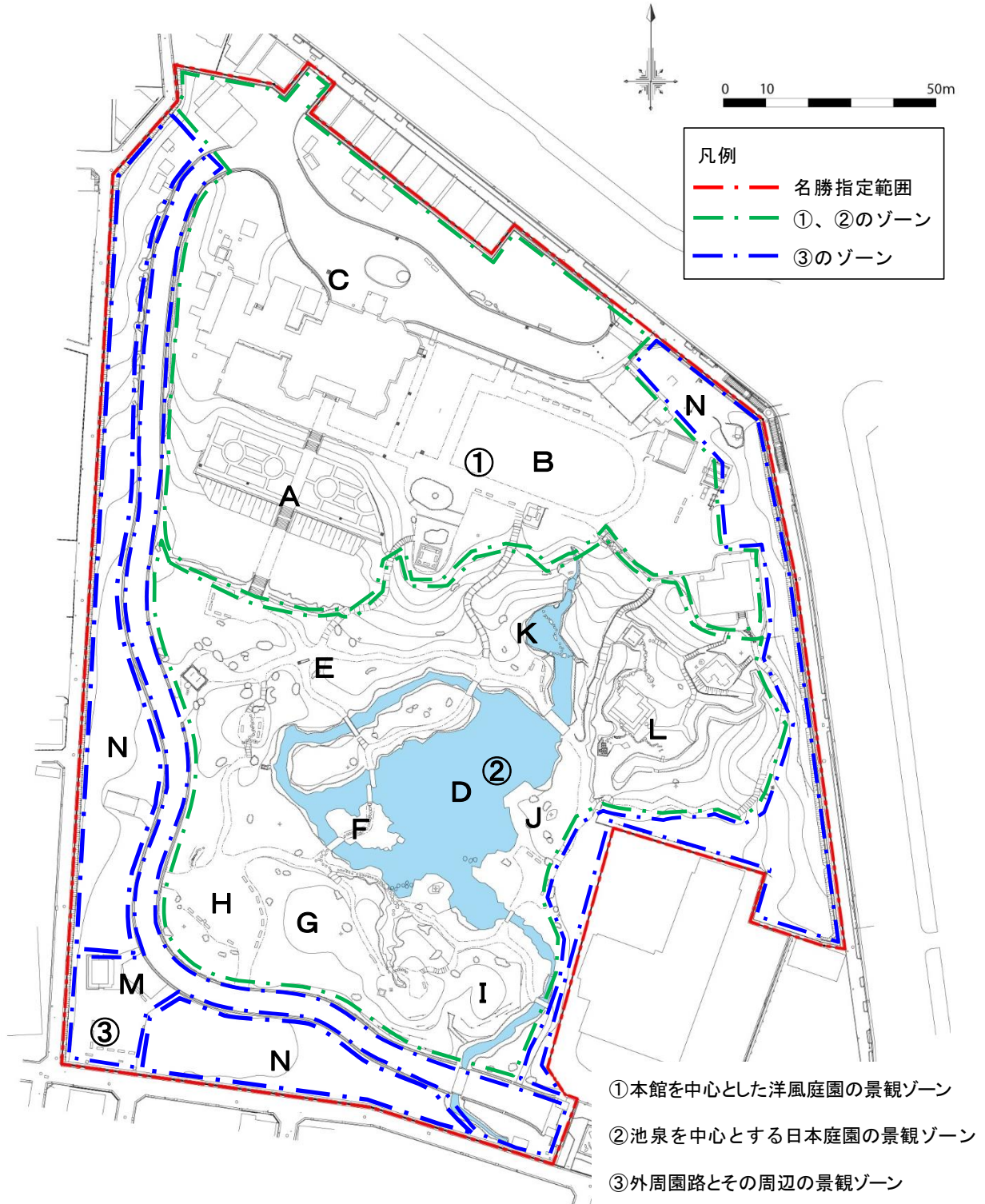


図 2-154 景観ゾーン及び地区区分図

II 本園の歴史・本質的価値

本園の「価値を構成する要素」について、庭園の主な構成要素は表2-6のとおりであり、本園の維持管理や運営上必要である要素を「本質的価値を構成する要素以外の要素」として、表2-7に整理した。

表2-6 本園の本質的価値を構成する要素

ゾーン	要素
① 本館を中心とした洋風庭園の景観ゾーン	地形：テラス式庭園、芝生広場 護岸・石組：黒ボク石積 建造物：洋館、正門、車庫、書庫、井戸、外周塀 植栽：バラ園、上記の要素に関連する植栽
② 池泉を中心とした日本庭園の景観ゾーン	地形：心字池、中島、沢流れ、荒磯、溪谷、 護岸・石組：大滝、枯滝、女滝、崩れ石積、黒ボク石積 建造物：下の茶室、茶庭、庭門 石造物：石橋、二枚橋、舟着石、石燈籠、多層塔 植栽：上記の要素に関連する植栽
③ 外周園路とその周辺の景観ゾーン	地形：馬車道 護岸・石組：黒ボク石積 建造物：染井門、外周塀 植栽：上記の要素に関連する植栽

表2-7 本園の本質的価値を構成する要素以外の要素

分類	要素
植栽	本質的価値を構成する植栽（表2-6）以外の植栽
公開・活用施設	案内板、解説板、掲示板
休養施設	展望台、見晴台、ベンチ
便益施設	便所、水飲み場、売店、上の茶室
管理施設	西門、兜門、給排水管、電気通信管、ごみ箱、貯水設備、浄化設備
管理運営のための建物	サービスセンター（管理事務所）、倉庫、ごみ置場、物置

1 本館を中心とした洋風庭園の景観ゾーン

1) テラス式庭園

コンドルは、建物から庭へと続く連続性を重視し、洋風庭園の設計に土地の高低差を活かして、当時の英国で再流行していたヴィクトリア朝のイタリア（テラス）式を取り入れた（図2-155）。



図2-155 テラス式庭園
平成30（2018）年12月10日

洋館から見下ろすように配置された洋風庭園は、三段構造になっており、構成は上段、中段から下段にかけて洋風から和風、整形式から自然式へとその性格に変化を見せ、本園を特徴づける重要な景観となっている。また、上段は、洋館を囲むテラスで、中段の整形式花壇とともにバラ園として、洋館を引き立てている（図2-156）。



図2-156 テラス上段・中段
平成30（2018）年12月10日

第二段のテラスは、洋館からの眺望を考慮し、洋風庭園に多く見られる平面幾何学式模様の花壇を採用している。

花壇にはおよそ100種200株のバラがあり、春と秋には色鮮やかな花が咲きそろい、特徴的な景観要素となっている（図2-157）。



図2-157 第二段 整形式花壇
平成30（2018）年12月10日

第三段のテラスは、ツツジの刈込になっており、幾何学的な模様から自然的景観へと移行し、洋から和へと植栽樹種も配植も変化している（図2-158）。



図2-158 第三段 ツツジ刈込
平成30（2018）年12月10日

2) 芝生広場

整形形式花壇（バラ園）の洋風庭園に対し、洋館東側は芝生広場として、洋館全体をとらえるビューポイントとなっている。また、様々な催事等の会場となっている（図2-159）。

当初の配置プランから計画されている重要な景観要素である。



図2-159 芝生広場
平成30（2018）年12月10日

3) 洋館

古河家の本邸となった建物で、構造は煉瓦造2階建て、外壁は真鶴産の新小松石（安山岩）の石積みで粗面仕上げとし、屋根はスレート葺で、急勾配の切妻屋根となっている。また、内部は1階を洋風、2階を和風としており、洋と和を併用した大正初期の西洋邸宅建築としての姿を留め、コンドル最晩年の作品として貴重な建物である（図2-160）。

大正6（1917）年5月に竣工し、昭和58（1983）年から平成元（1989）年、平成10（1998）年から平成13（2001）年の2回修理を行っている。



図2-160 洋館
平成30（2018）年12月10日

4) 正門

正門は、小松石の角柱に鋳鉄製の鉄柵が取り付けられている（図2-161）。鉄製の柵部の意匠は、コンドルの図面の正門とほぼ一致している。石畳の敷き方もコンドルの図面配置図のものと一致している。



図2-161 正門
平成30（2018）年12月10日

5) 書庫

建物は煉瓦造石積みに入母屋屋根を架けた和洋折衷の外観と、ステンドグラスの使用など内装にも意匠が凝らされ、保存状態も良好であることから、近代建築意匠の記録として貴重な建築物である（図2-162）。

コンドルと辰野金吾の指導を受けた建築家の一人である葛西萬司の設計とされ、古河邸整備当初に築地本邸から移築された。古河邸時代は「文庫」と呼ばれ、美術品を収蔵する石造倉庫であったとされる。



図2-162 書庫
平成30（2018）年12月10日

6) 車庫

妻壁に煉瓦タイルを張った切妻屋根スレート葺の建物であり、現在はガイドボランティアの休憩室として使われている（図2-163）。

コンドルの配置プランに記載されており、古河邸時代から残された貴重な建物の一つである。



図2-163 車庫
平成30(2018)年12月10日

7) 井戸

二方向に板壁が張られた切妻スレート葺の屋根を持つ建物で、中に井戸がある（図2-164）。



図2-164 井戸
平成30(2018)年12月10日

8) 黒ボク石積

黒ボク石は、富士山の溶岩で、多孔質で軽く、加工もしやすい。山の雰囲気が出るため、主に関東で石組みとして用いられることが多いが、本園では土留めを兼ねて石垣状に積まれている（図2-165）。

黒ボク石組によって、洋風庭園から日本庭園へ向かう部分が連続的景観として処理されており、特徴的な景観要素となっている。



図2-165 黒ボク石積
平成30(2018)年12月10日

2 池泉を中心とした日本庭園の景観ゾーン

9) 心字池

日本庭園の池は、鞍馬平石や伊予青石など日本各地の名石が配されている。

池泉を中心とした庭園部分の主要な構成要素（主景）は、池の北東、台地斜面の上から注ぎ落ちる大滝と、大滝からの流れに渡された橋、荒磯と枯滝、雪見燈籠等からなる南側池畔、そして中島周辺等であり、心字池を中心に多様な水景が構成されている。池の周囲を巡りながら鑑賞できるよう、景観に変化を与えている（図2-166）。



図2-166 心字池
平成30(2018)年12月10日

10) 中島

中島は、池泉に浮かび、景観に変化を与えており、庭園を回遊する際の主要な眺望地点となっている。また、荒磯や枯滝、雪見燈籠等の眺望のポイントともなっている（図2-167）。



図2-167 中島
平成30(2018)年12月10日

11) 沢流れ

心字池から注がれた水が、南東方向に流れていき、自然の風景に見立てた沢の流れを意図した景観要素となっている（図2-168）。



図2-168 沢流れ
平成30(2018)年12月10日

12) 荒磯

雪見燈籠が据えられた磯浜に見立てたゴロタ石敷は、この庭園の景観の中心であり、雪見燈籠と一体に心字池の主景を構成している（図2-169）。



図2-169 荒磯
平成30(2018)年12月10日

13) 溪谷

洋風庭園と日本庭園の間の樹林地、細長い島状の部分によって形づくられ、深山幽谷の景色を表現している（図2-170）。池の中にある水路を溪谷として見立て、洋風庭園と日本庭園との境界とし、「洋」と「和」を区切る部分となっている。



図2-170 溪谷
平成30(2018)年12月10日

14) 大滝（男滝）

大滝は本郷台地の斜面を巧みに利用して整備され、7 mもの落差をもって 20 数mを流れ下る。七代目小川治兵衛が作庭した他の庭園と比較しても際立った大きさで、この庭園の特徴と言え、重要な景観要素となっている（図2-171）。



図2-171 大滝
平成30（2018）年12月10日

15) 枯滝

伊予青石などの巨石を滝添え石に、流れに伊勢及び撰津ゴロタ石が使われている。この沢の園路に接するところの伊予石、和知川の景石とともに奥深い景観を演出している（図2-172）。



図2-172 枯滝
平成30（2018）年12月10日

16) 崩れ石積

石を垂直に積む方法のうち、崩れ石積は京都で発達した伝統的な工法である。茶室・茶庭と池との間において崩れ石積を用いており、植治の技巧が凝らされた部分として観賞できる貴重な景観要素となっている（図2-173）。



図2-173 崩れ石積
平成30（2018）年12月10日

17) 下の茶室・茶庭・女滝

下の茶室は古河邸整備当初から現存する建物であり、数寄屋風の建物で、八帖の部屋に水屋がある造りとなっている。地下には煉瓦造の地下室がある（図2-174）。

下の茶室東の女滝は、男滝（大滝）と対となるものとされる。現在は水が流れていないが、女滝から溪流となる流れが確認できる。滝と軽快な流れを得意とした七代目小川治兵衛の見せ場となる部分であったと考えられる。



図2-174 下の茶室・茶庭
平成30（2018）年12月10日

18) 庭門

茶室・茶庭の入口の門で桧皮葺となっており、中門の役割を担う（図2-175）。庭門を入ると北側山手には内露地があり、そこには織部燈籠と蹲踞が組まれている。



図2-175 庭門
平成30(2018)年12月10日

19) 石橋

心字池に流れこむ溪谷にかかる一枚岩の橋で、紅葉期には周辺のカエデが美しく彩る（図2-176）。図2-42の図面においても同じ場所に橋が架かっていることが確認できる。



図2-176 石橋
平成30(2018)年12月10日

20) 二枚橋

二枚橋は、心字池の西岸と中島を結ぶ石橋である。2枚の井内石（仙台根布川）を筋違いにつないだ石橋で、心字池を見渡す眺望のポイントとなっている（図2-177）。図2-42の平面図で、二枚橋の形状が確認できることから当初より存在するものと考えられる。



図2-177 二枚橋
平成30(2018)年12月10日

21) 舟着石

池縁の水際にある舟着場ともいえる場所は、心字池の眺めの要となる所で、正面に見える荒磯に強制的に据えられた雪見燈籠や、その奥に見える枯滝の石組、その背後に見え隠れする多層塔への通景線が集まる位置にある（図2-178）。



図2-178 舟着石
平成30(2018)年12月10日

22) 石燈籠

雪見燈籠は、池の主景となっており、配置は周辺のどの部分から見ても絵となる構図を構成している（図2-179）。

その他、本園内の石燈籠や石造物は大型のものが多くことが特徴で、園内を巡る際のアクセントとして重要な景観要素となっている（図2-180～185）。



図2-179 雪見燈籠
（平成30年12月10日）



図2-180 奥の院燈籠
（平成30年12月10日）



図2-181 泰平型燈籠
（平成30年12月10日）



図2-182 春日型燈籠
（平成30年12月10日）



図2-183 多層塔
（平成30年12月10日）



図2-184 織部燈籠
（平成30年12月10日）



図2-185 濡鷺型燈籠
（平成30年12月10日）

3 外周園路とその周辺の景観ゾーン

23) 馬車道

染井門から敷地外縁部を巡るように洋館まで馬車道が続いている（図2-186）。この馬車道のアプローチは、染井門から賓客を迎え、洋館へと誘導する重要なアプローチ空間となっていたと考えられる。



図2-186 馬車道
(平成30年12月10日)

24) 染井門

染井門は、木造入母屋棧瓦葺平屋建の純和風の門であり、本園敷地南端にある（図2-187）。古河家整備当初から存在し、賓客を迎えるための入口だったとされる。

昭和41（1966）年に修理工事が行われたが、現在は閉鎖されている。園外は北区に移管された児童遊園となっている。



図2-187 染井門
(平成30年12月10日)

25) 外周塀・石積

庭園の外周塀は古河邸時代からのものと推定される小松石積の上に煉瓦積モルタル仕上げ、瓦葺で構成されるもので、平成23（2011）年の東日本大震災で被害を受け、修理された（図2-188, 189）。

庭園外周は外周塀のほか、石積のみとなっている部分や、小松石積でなく玉石積みで構成される場所もある（図2-190）。石積の修理履歴は明らかでない。



図2-188 外周塀
(平成30年12月10日)



図2-189 外周塀の断面
(平成30年7月7日)

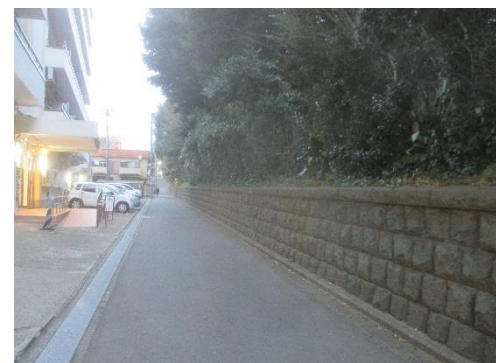


図2-190 石積
(平成30年12月10日)

東京都における文化財庭園の保存活用計画（旧古河氏庭園）

<歴史的変遷の参考・引用文献>

- 1) 東京都公園協会. 「平成 22 年度特別企画展 龍馬ゆかりの人々と 5 つの都立文化財庭園物語」. 2011
- 2) 古河合名會社内五日会. 「古河市兵衛翁傳」. 1926
- 3) 北村信正. 東京公園文庫 29 「旧古河庭園」. 1981
- 4) 古河合名會社内五日会. 「古河潤吉君伝」. 1926
- 5) 古河虎之助君傳記編纂會. 「古河虎之助君傳」. 1953
- 6) 渋沢栄一伝記資料刊行会. 「渋沢栄一伝記資料 第 49 卷」. 1963
- 7) 進士五十八. 「日本庭園 造景の技とこころ」. 2005
- 8) 栗野隆. 「旧古河庭園の後世に残すべき価値」. 都市公園 224. 2019
- 9) 鈴木博之. 「庭師小川治兵衛とその時代」. 2013
- 10) 河東義之. 「ジョサイア・コンドル建築図面集 I」. 1981
- 11) 日本建築学会. 「ジョサイア・コンドル博士表彰」. 建築雑誌 402 号. 1920
- 12) 河東義之. 「ジョサイア・コンドル建築図面集 III」. 1981
- 13) 財団法人大谷美術館. 「東京都指定名勝 旧古河庭園本館修理工事報告書」. 2001
- 14) 鈴木誠. 「旧古河庭園の和洋と近代」. 文化財の保護 第 36 号. 2004
- 15) 河東義之. 「旧古河庭園（古河家西ヶ原本邸）の建築とその文化財的価値」. 都市公園 224. 2019
- 16) 鈴木博之. 「古河邸再訪 新建築住宅特集 8912」. 1989
- 17) 尼崎博正. 「七代目小川治兵衛～山紫水明の都にかへさねば」. 2012
- 18) 建築画報. 第 9 卷第 6 号. 1918
- 19) 植島暁子. 「植治」. 研修会報告. 大谷美術館報 8. 2001
- 20) 河東義之. 「旧古河家西ヶ原邸「書庫」について」. 文化財の保護第 36 号. 2004
- 21) 建築世界. 第 11 卷第 5 号. 1917
- 22) 河東義之. 「旧古河庭園の「下の茶室」について」. 大谷美術館報 18. 2011
- 23) 建築画報. 第 8 卷第 2 号. 1917
- 24) 植島暁子. 「インタビュー：小島義一さんに聞く 古河庭園の思い出」. 2001
- 25) 古河従純君伝編纂委員会. 「古河従純君伝」. 1971
- 26) 公文書. 「庁議決定通知 旧古河庭園に関する訴訟和解の処理方針について」. 1959
- 27) 東京府. 「大正震災美績」. 1924
- 28) 北区史編纂調査会. 「北区史資料編 現代 2」. 1996
- 29) Y・M 生. 「舊古河庭園」開く 大正初期の富豪の邸園. 都市公園第 2 号. 1956
- 30) 毎日新聞. 「北区議会も立上る」. 1953. 5. 17
- 31) 公文書. 「国有財産（物納）の使用賃借契約締結について」. 1955
- 32) 朝日新聞. 「古河邸を公園に開放」. 1955. 4. 22
- 33) 大谷光陽子. 「庭園と一体化した旧古河邸の保存と活用 大谷美術館として」. 都市公園 224. 2019
- 34) 大谷米太郎追想録刊行委員会. 「一心大谷米太郎」. 1969
- 35) 東京都建設局. 「覚書」. 1964

- 36) 北区役所. 「北区政概要 昭和 29 年版」. 1954
- 37) 朝日新聞. 「” 銅山王の城” を開放」. 1956. 5. 2
- 38) 旧古河庭園旧古河邸本館修理委員会. 「東京都名勝指定 旧古河庭園旧古河邸本館修理工事報告書」. 1989
- 39) 公文書. 「旧古河庭園総合計画図」. 1965
- 40) 井上説子. 「『空中庵』について作者に関する考察」. 大谷美術館報 8. 2002
- 41) 北区史編纂調査会. 「北区史通史編 近現代」. 1996
- 42) 三浦展. 「昭和の郊外 東京・戦前編」. 2016
- 43) 旧土地台帳. 東京法務局北出張所
- 44) 東京都建設局. 「旧古河庭園洋館修復準備設計修復基本計画報告書」. 2015
- 45) 東京都建設局. 「17 年度 旧古河氏庭園の国指定文化財（名勝）指定申請書類」. 2005
- 46) 東京都建設局. 「旧古河庭園マネジメントプラン」. 2015
- 47) 東京都公園協会. 「旧古河庭園 和と洋が調和する大正の庭」. 2010
- 48) 黒川徳男・保垣孝幸. 「目で見る北区の 100 年」. 2013
- 49) 旧古河邸 大谷美術館 HP <http://www.otanimuseum.or.jp/kyufurukawatei/index.html>
- 50) 旧古河庭園 100 年記念事業／東京都公園協会 HP 公園へ行こう！https://www.tokyo-park.or.jp/special/pickup/2018_furukawa100.html
- 51) 東京都北区教育委員会. 「旧渋沢家飛鳥山邸と旧古河氏庭園の国文化財指定について」. 文化財研究紀要 19 集. 2006
- 52) 双木秀治・齊藤勝成. 「計画・調査 東京都における文化財庭園の保存管理計画」. 旧古河氏庭園 保存管理計画書の策定. 都市公園 182 号. 2008
- 53) 大場秀章. 「洋館と薔薇の庭」. 薔薇の園. 緑と水のひろば No. 43. 2006
- 54) 芦田正次郎・工藤信一. 「北区史跡散歩」. 1993
- 55) 北区立中央図書館. 「北区の歴史はじめての一步」. 2011

※上記の引用文献は、全てが本文中に記載されているものではない。